シンポジウム「コリアにおける日本研究の現在」の総合討論

鈴木貞美（司会・日文研）　時間がかなり超過していますけれども、総括討議に入りたいと思います。

最初に、ここにいらしていてまだ発言をなさっていない方、ぜひ何か一言、お一人３分くらいで、よろしければお願いします。どうぞ。

浮葉正親（名古屋大学）　今日、最初に家族の話を聞きまして、やはり一番韓国の人に理解されていないのはひょっとすると日本の家族の姿じゃないかと思いました。私は留学生の教育をしていますけども、例えば日本人は結婚して名前が変わることとか、あるいはいとこ同士で結婚できるということとか、あと養子の問題ですね。結構見ていきますと家族をめぐる制度が随分違うのですが、その辺に対しての認識がほとんどない、まず学生たちの知識としてですね。

それから、これも人間関係の問題なんですけれども、お互いの家族をめぐるコミュニケーションでも大分違いがあり、個人的な話ですが、私は妻が韓国人なんですが、やはりお互いの家族に対する思いというのが随分違いまして、家族の問題は非常に大事な問題だといつも感じています。

それから、先ほどの発表のタイトルが「日韓コミュニケーション・ギャップとその背景」というので随分期待したんですが、コミュニケーションの仕方もやはり随分違いがあるなと感じております。韓国の人から日本人のコミュニケーションの仕方が非常に冷たいというふうに言われることが非常に多いのですけれども、この背景というのがどういうところから来ているのかということに興味があります。この２点、これから日本と韓国の研究者が集まって研究していくときに欠かすことのできないテーマではないかと思います。

司会　ありがとうございます。どうぞ、ほかの方。

鄭　大均（東京都立大学）　今日の三つのお話は、ある意味では非常に面白い。熊谷先生のお話というのは、最近のアメリカの学者の語り口というか、非常に方法論というもの、ディシプリンというものにエネルギーを、たとえば、Ph.Dの論文を書くとき7割のエネルギーを方法論について当てるという最近のアメリカの学者の流儀が非常に反映されたものだったと思うのです。それが2番目の李先生の話になるとディシプリンとはほとんど無縁の非常に恣意的な話というか、身の上話というふうにおっしゃっている人がいましたけども、そういう形になっている。個人的に勉強になったのはやっぱり熊谷先生のお話です。熊谷先生のお話のテーマはアジアの家族ですね。しかしここには地域についての話とディシプリンについての話との間にもう少しバランスがあるのが好ましいという印象がありました。そういう面で言うと熊谷先生のものにも、必ずしも自分自身はそういう流儀を使いたくないという気持ちがある。しかし、李先生のお話について言うと、これはほとんど何の根拠もない話であったというふうに思います。

それから、2番目と3番目の関係で言いますと、今、在日コリア研究者というふうなことを言うときに、やっぱり主流になっているのはニューカマーの韓国人であると思うんですね。そういう面で言うと金先生よりは李先生のほうが日本の中におけるコリア研究者としても主流というか、大きな流れになっていると思うんです。ですから、金己大先生には失礼ですけど、オールド・タイマーの在日のコリア研究者というのは衰退しているということですね。それはそれでいいのですけれども、ニューカマーの研究者がオールド・タイマーの在日の研究者を乗り越えているのかというと、少なくとも今日二人、三人だけでは、きちんとそういう明るい展望が見えるという感じはしませんでした。

いろいろ感じることがあったのですけれど、そんなところでしょうか。

司会　ありがとうございます。今日に限らず3日間のことで、ぜひとも発言しておきたい方、特に発言なさっていない方に発言を促したいと思います。どうぞ。

水島かな江（神戸松蔭女子学院短期大学）　特に意見というわけではないのですが、感想を述べたいと思います。私には日本で育った韓国人の友人がいますが、これまで、彼女に対して、ほとんど異文化を感じたことがありませんでした。今回3日間参加しまして、例えば発表の仕方、質問の応対の仕方、それから、私は韓国語がわからないのですけれど、母国語同士での会話の仕方など、何か微妙に違うな、というのを肌で感じています。その違いをまだうまく言語化できないのですが、そのあたりをきちんと見ていく中で、同じアジアといっても違う微妙な国民性を、今どうやって言語化し、整理していったらいいのかなと考えているところです。そういう意味ではとても有意義な3日間だったと思います。

川口智彦（日本大学）　鄭大均先生がおっしゃってしまったことかもしれないんですけれど、実は私、3日間を通じて大変驚いたことがあります。まず、このリストの在日在住コリア研究者。これは私の頭の中ではいわゆる在日韓国・朝鮮人の方だというふうに決めつけていたんです。実際この場に来てみると、私がお話しした限りでもかなり多くの、むしろマジョリティーが、先ほどニューカマーとおっしゃいましたが、いわゆる在日韓国・朝鮮人ではない研究者の方たちで占められている。これは人の集め方とも関係があったのかもしれないんですけれど、このシンポジウムに参加してみて、何か日本における韓国・朝鮮を研究する人たちの新しい層が形成されているのではないかという、そういう非常に大きな感銘を受けまし

た。

金　良柱（培材大学校）　質問ですが、ずっと前から「在住」というのはどういう意味かという、在日外国籍研究者というのはよくわかりますが、前についているのは何でしょうか。

鈴木貞美（日文研）　オーガナイザーとして反省も含めて少し発言しておきたいと思います。まず、今回は日本在住の外国人研究者のシンポジウムとしては第2回です。第1回は昨年度で、「バブル経済崩壊後の日本研究」というテーマで、国籍を問わずに、日本に滞在している外国人の研究者に集まっていただきました。その第2回目なのですが、今回は韓国から15名の先生方にいらしていただき、いわゆる在日朝鮮人・韓国人の先生方と、それから日本人も入れて、「コリアにおける日本研究の現在」と題して、学際的、総合的なシンポジウムを企画したわけです。もちろん、来訪研究などの形で日本にいらしている方々も含めております。

参加者の集め方のことでちょっとご質問がございましたけれども、最初のオープニングのときに申さんが説明しましたように、在日在住の方に関しては、日本の4年制大学に籍を置いて、何らかの形で韓国・朝鮮について授業を持っている先生方をピックアップして、全員に手紙を出しました。それからいわゆる在日韓国人、朝鮮人として発言なさっている評論家とか、そういう方々、それから少し広げまして例えば和田春樹さんのような方にもお手紙を差し上げて、いただいた返事で、発表したいという御希望があった方を全部リストアップしました。その段階で、一切私どもはセレクションをかけておりません。タイトルから判断して順番は、こちらで好き勝手に並べさせていただいたわけですけれども。

金　良柱（培材大学校）　大体どのぐらいいらっしゃったんですか、在住の韓国人研究者は。四年制大学にいらっしゃる学者の数で

すね。

申　昌浩（日文研）　私は、今回のシンポジウムの参加者を集めるために、インターネット検索システムYahoo Japan【http://dir.yahoo.co.jp/education/universities/】の日本全国の大学の都道府県別一覧に目を通し、各大学のホーム・ページから日本在住のコリア（韓国・北朝鮮）研究者たちと、日本人研究者を検索しました。Yahoo Japanの日本全国の大学の都道府県別一覧にホーム・ページをリンクしている4年制大学に焦点を合わせ、検索を行いました。その中でも、人文・社会科学関係の学科や学部を設置している大学とその大学で専任講師として在職している方及び、科目を担当している方々に、このコリア・シンポジウムへの参加を呼びかけました。

各大学のホーム・ページに掲載されている方々を中心にお呼びかけしましたので、日本全国にいらっしゃる在住コリア研究者の本当の数は、把握していない状況です。それも各大学のホーム・ページへのアクセスがうまくできなかったり、コリア関係の科目もしくは講義はあるけれども、その担当研究者に関する情報をいっさい掲載していなかったというような場合も多くありました。出来る限りの検索に基づいた人選とその他のコリア研究者たちにも手紙を送りました。その数は、日本人研究者に約100通、在住コリア研究者に100通ほどの手紙を送りました。

この呼びかけの方法は、これまでとはまったく違った形の研究集会を開きたかったため実験的に行ったものでした。研究者の招集に全くバイアスをかけないためにも、各大学のホーム・ページを一つ一つ検索し、韓国・朝鮮に関する論文を書いたことのある日本人の先生方や日本在住で日本の大学で韓国・朝鮮関係の授業を持っておられるコリア研究者を捜しました。特に、教員紹介の部分がない大学のホーム・ページは、ゼミや講義要項などをも参考にし、それらの科目を担当しておられる先生たちに手紙を出しました。けれども、インターネットの検索システム上の問題ですから、あまり明確に把

握することはできませんでした。実際、ネットに韓国・朝鮮研究者らしき名前は掲載されていたり、どう見てもこれは韓国人の名前だなと思うけれども、その講義内容がはっきり出ていない先生たちがかなり漏れていることも事実です。しかし、皆さんよくご存じのように、いまの時期は、日本の各大学が入試を迎えておりますので、多くの先生方が興味は示してくれましたが参加できない状況も重なっております。実をいうとこのシンポジウムの案内に対する手紙に多くの返事がありました。あまりにも反応が良かったので主催する側としてもびっくりしております。

話は少し変わりますが、シンポジウムの参加者を募るために行った検索の結果といくつか気づいたことについて話したいと思います。これはまったく私の個人的な見解ではありますが、日本在住のコリア研究者及び日本人研究者たちの地域的な分布とその研究者たちの研究内容についてです。まず、地域による分布とその特徴は、東日本に比べ、西日本により多くの在住・在日コリア研究者が集中していたということです。むろん、東京のような大きな都市には多くの研究者がいると考えられますが、実に多くの研究者が九州地方に集中しておられましたことにはちょっと驚きました。そして、人文科学関係のカリキュラムを担当しているコリア研究者の多くは、ハングル講座を担当しながら、自分の専門研究領域を教えている状況のことでした。最後にもう一点ですが、これは以前からよく言われていたことを改めて確認したようなものです。99もある日本の国立大学に、朝鮮半島関係の学科や研究者が少ない現状が相変わらず続いているということでした。少ない朝鮮半島に関する研究者も、主に日本人研究者であったということを確認することができました。以上です。

司会　大学によってホームページのつくり方が違いまして、なかなか入ってもわかりにくいところもあったりして、技術的な問題もあると思います。

一つだけ先に反省点を申し上げますと、本当に時間を短く区切らせていただいて、もっとご発言をなさりたい方もたくさんいらしたと思いますけれども、本当に厳しい時間の中で申しわけありませんでした。今日の午後までやればもう少しゆっくりとれたのかもしれませんが、日文研は日曜日の食堂の具合がよろしくないので残念なのですが。総括討論をもう少し続けたいと思います。ご発言、どうぞ。

原田　環（広島女子大学）　非常に有益な企画で、こういう企画をなさった方々にお礼を申し上げます。

私は韓国における日本研究の現状というのを個人的にはいろいろと知る範囲で努力してきましたけれど、こういうふうな形でパースペクティブにやっていただいたのは非常にありがたいと思っています。私の大学の中でもアジア研究を近・現代のほうに地域を限定してやろうとしていまして、人事も含めて、韓国人であろうと誰であろうと、力のある人はどんどん採用したいと思っています。

今日のこれまでのご報告を伺いまして、日本の中での韓国研究のシステムづくりをもう少しきちんとやったほうがいいのじゃないかということと、韓国と日本との相互理解の研究システムというのをもうちょっとリアリティーのあるものを立ち上げていくということも必要ではないかと思いました。

私事で恐縮ですが、私は1976年から広島でボランティアで朝鮮半島の情報についての講座を開いているんですけれども、1980年代半ばぐらいを画期にして、それまでは大体在日の人が講師に多かったのですけれども、以後は講師を直接韓国からお呼びしたり、国内からきていただく場合は、韓国での現地体験を持っている方にお願いするように変わりました。これはニーズが高度化したためです。大学のシステムに対するニーズも変わっていると思います。これから卒論とか実習とか、韓国に直接行ったり、また韓国のほうの日本研究でも日本に直接来るとか、サマーセミナーを１週間やるとか、相

互理解の現地実習というのが増えていくと思います。そういう意味で、今回の企画は大変有意義で、声をかけていただきまして非常に参考になりました。ありがとうございました。

渡辺雅子（日文研）　今回のシンポジウムで大変勉強になりましたことは、先日韓国の日本学会のニューズレターを見まして、そこで取り上げられている研究課題がとてもタイムリーなもので驚いたのですが、その背景がわかったことです。今現在日本で起こっていること、それからこれから起ころうとしていること、私の専門分野は教育なんですけれども、例えば独法化の問題であるとか、総合学習の問題であるとか、まだ日本の教育社会学会などでは取り上げられていないような問題が韓国の学会ですでに研究され、議論されていることに大変感銘を受けました。今回いろいろなお話をうかがう中で、韓国で日本研究をされている方が、実は日本で学問的な訓練を受けて、日本にもその後何度も来ておられて、日本の事情を大変良くわかっていらっしゃるということがわかりました。そのような研究者の状況から、なぜ韓国で日本と時間差の無い研究が出来るのか、そのなぞが解けたような気がいたします。

アメリカにおける日本研究ですと、韓国とは逆に、アメリカで理論も方法論も学んで、博士論文を書くために日本へ調査に来て、また帰るというパターンが多いようです。そうすると、日本で今何が起こっているのか、どんなことが話題になっているのかということが日本研究者の間で見えにくいということをアメリカで聞きました。日本研究と言っても、それぞれの国固有の問題があるのですね。

また、今、韓国の研究者でアメリカで研究されている方、また韓国から日本に来られて勉強している方というのは、日本研究をする理論や方法論も全く違っているわけですが、韓国にそれを持ち帰って、これからそれがどんなふうにダイナミックに交流していくのかということは大変楽しみだと思います。ありがとうございました。

鈴木貞美（日文研）　今のは面白い指摘だと思うんですけれども、これまでと、あるいは今後の問題だと思いますが、もう少し踏み込んで言うと、熊谷さんが、エリアスタディーズのひとつとしての日本研究とおっしゃったと思うんですね、ちらっとですけれども。アメリカ型だと、理論を勉強して、あくまでもそのケーススタディーとかエリアスタディーとして日本を扱うという形ですね。こういう訓練を受けて韓国に帰って研究をしてゆく方がおられる。最初に過去の歴史的な経緯があるわけですから、そこに蓄積されているさまざまな感情を含めた研究主体としての困難性ということを最初に金先生が基調報告でおっしゃいましたが、いわば、そういうことを飛ばしてアメリカ型の研究というのがなされていると思うんですけれどもそのような研究主体と方法について、私が言うのは、いけないかもしれませんが、対話というんですか、方法的なせめぎ合いとかということが今後どういうふうに進んでいくのか、面白いと言ったら、無責任になるかもしれませんけれども、関心をもちますが、いかがでしょうか。

黄　達起（啓明大学校）　韓国における日本研究という分野の中で、私は人類学をやっているものですから人類学分野のことだけ話しますと、韓国で学部を出て、大学院をアメリカあるいはイギリスでやりながら、フィールドワークは日本でやった方が一つの集団としてあって、その次に、学部は韓国、大学院は日本、フィールドワークも日本でやったグループがあります。普通、前に言ったのは‘アメリカ産博士’とか、2番目は‘日本産の博士’とか、それで3番目は最近出ているんですけれども、学部、大学院をすべて韓国で勉強して、フィールドワークだけ日本でやったグループがあります。今ここで議論する言葉が日本語だから、多分、アメリカに留学して日本でフィールドワークした人は自由に発表できないと思います。人類学者はほとんどできると思いますが、人類学以外の方は発表するまでは少し難しい点があるのではないかということだけちょっと。

司会　使用言語を一方的に、皆さん日本語が大変上手だという前提で日本語にしてしまったんですけれども、英語と併用するとか、そういう形になれば、より広い分野からの参加者があるということですね。

黄　達起（啓明大学校）　そうです。

司会　ありがとうございました。あるいはほかの分野の方で、この問題に関して、どうぞ。韓国における日本研究の方法的な問題が様々に交錯しているのではないか、それは日本でも同じようなことが起こっているとも思うわけですね。日本には日本研究という分野が、総合的な日本研究という分野は、あったとしても珍しいのはないわけですね。各分野でどういう形でやるかというのは、アメリカでトレーニングを受けてきて、日本をあたかもエリアスタディーズのようにやる、そういうケースもあるでしょうし、そうではない、いわば近代的な形成されてきた学問各分野のディシプリンやメソッドの上で、あるいはそれを改革しながらやっていくというようなことは、日本においても相当交錯しながら行われていると思うんですけれども。

鄭　大均（東京都立大学）　ある面では交錯しなくなってきているという状況もあると思うんです。例えば日本研究の場合でも、エズラ・ボーゲルだとかジェラルド・カーティスだとか、ああいう世代の日本研究者は日本人ときちんと対話ができる人ですね。比較的親日的というか、日本好きな人が多いということもあるのですけれども、その次の世代というか、彼らに育てられた世代というのは、日本人と全く無縁というわけではないんだけれども、日本で誰と対応するかというと外務省の人間と英語でしゃべったりするという、そういうコミュニケーションの経験しかなくなっているということ

がありますね。

日韓の場合で言うと、もともとアカデミズムのレベルではなくて一般的な日本人と韓国人の比較をした場合に、もともとは韓国人のほうがむしろ日本の文化と韓国の文化をどちらも包括して見ることができるという、そういう立場にあったのは日本側の人間というよりは韓国側の人間であったと思うのですけれども、そういう人間がどんどんいなくなってしまって、そういう面では今はイーブンになったとも言えるんですけれども、学者のレベルで言うと、日本のほうが急成長して、韓国のほうは必ずしもそうではないと言えるかもしれませんし、アメリカの日本研究者なんかが、ある面では英語の文献だけで日本研究ができるようになったように、韓国のほうも韓国の文献だけで日本を研究するという可能性も出てきているわけですね。ですから、一方でいろんな形の交錯というのはあるわけですけれども、他方ではそういうものが希薄になっているという、そういう状況があるように思います。

沈　慶昊（高麗大学校）　これは日本学の問題だけじゃなくて、韓国における中国学と西洋学も同じ状況なんですけれども、実際は韓国では教育部で人文学を発展させよう、振興しようという動きがありまして方案を今つくっています。僕はそのメンバーの一人なんですけれども、大学の研究所を評価して援助するとか、学術振興財団が研究者個人をより広い範囲に支援するというシステムに取り組むことを要求するつもりなんです。しかし、その資金ということは大分ありますけれども、実際に大学院を中心とした教育が行われていかないと韓国の人文学は崩壊してしまう危険があります。日本学の状態ははっきりわからないですけれども、中国学とか西洋学の場合は、かなりの人が修士を経て、博士は外で取るという傾向がありまして、大学院の授業が成り立たない傾向があります。資金があっても人文学は崩壊するという危険な状態に追い込まれているのです。韓国の能力開発院が去年の12月に報告した内容によると、これから

の6年の間、博士を取って帰ってくる全体の人数は15,000人にも上る可能性があるんです。帰ってきても就職口がなくなるでしょう。今日本学は受けているし、中国学はほかの学部とは違って大分状況はいいのですけれども、はっきり言えば、これからは事情がかなり苦しくなっていくと思います。また、独自の人文学を建てるためには、やはり韓国においての中国学、韓国においての日本学、韓国においての西洋学を発展させる必要があります。またそれが可能となるためにはまず内部で研究者を養わないといけないんです。外で全部教わって、それで帰国するというニューカマーではなくて、中で育てられた人が中心になって外国での研究成果を持ってくる人と研究の経験と成果を共有することが大事であると思います。

司会　今の問題については、ほかにないでしょうか。尹先生が漱石研究についておっしゃったように、日本の研究動向に引っ張られ過ぎるというようなご指摘も一方にはあったわけですね。

尹　相仁（漢陽大学校）　アメリカの大学でオリエンテーションを受けて帰ってきた研究者と、日本の現地にいて研究して帰ってきた研究者との研究の仕方の違いから来る問題はあると思います。それは断絶と言っていいかわかりませんが、でも、そのような断絶の問題は、ここに集まっている日本研究者の間にも当然あります。世代間による断絶を私は3日間を通してちょくちょく感じました。あるいはまた在日の研究者、それから我々のように韓国で日本をやっている研究者との間に置かれている断絶というのも当然あると思います。これもまた在日研究者の間でも、先ほども話に出ましたように、日本で生まれて日本研究をなさっている方と、留学して、ここに定着して日本の大学で教えている研究者の間における断絶。その断絶の問題は、断絶だからといってお互いに排除するわけにはいかないので、寄り合う形をとりながら、全体的に日本研究のレベルを高め合う、そういった方向に進めていかなければいけないと思いま

す。そういう意味で、こういった機会がたびたびあったら一つの糸口になるのではないかという気がします。

もう一つは、ほとんど韓国から来ている研究者たちが抱えている問題なんですが、3日間通して出ている一種の苦悩の告白というのがあったんですね。やはりそれは日本の研究の仕方に余りにも縛られ過ぎていて、それが韓国で自分の研究の成果の持つ重要さ、あるいは影響力に響くというような。ですから、そんな問題をみんな抱えていると思うんですね。なぜならば、日本的な研究の仕方は韓国の学会で、知識社会ではマイナーな領域ですので、そこで自分がやってきた成果をどのように普遍化してその情報の価値を高めてもらうことができるのか、それは非常に問題で、ですから、そう簡単ではありませんが、2枚の刃を用いるしかない。日本的な研究の仕方もちゃんと押さえておいて、あとまた韓国で用いるような研究の仕方を自分で見つけ出す、そういった二重の努力というのが要求されている。そういった状況ではないかと思います。

以上です。

司会　今の問題で、どうぞ。

落合恵美子（日文研）　今のご発言に対してちょっと質問なんですけれど、そしたら韓国の中における研究の仕方とか大学院教育というのはどういうものなんでしょうか。アメリカに近いのか、日本とは違うということで。

尹　相仁（漢陽大学校）　まず、簡単に言ってしまえば、日本的な研究の仕方は実証的である。アメリカ風の研究の仕方は理論と方法論に比重を置く。そういった差がありますね。ただ、特に我々の悩みの種は、日本で文献を地道に調べて、それで結果を得て論文を出すような仕方に慣れている人間にとっては、国へ帰るということは、これは今までのような研究の仕方ができなくなる。非常に苦し

い立場に追い込まれるということです。ですから、いやでも日本でやっていた研究の仕方と違った方法を自分で見つけ出さなきゃいけないという問題が出てくるという面があるんですね。答えになったかわかりませんが、簡単に言えば、理論よりは実証的、実地の積み重ねのようなことで日本人は論文を書くことに慣れていて、アメリカで勉強した人たちは方法論、理論、そういったところに重点を置くということが言えるのではないかと思います。

司会　研究の分野によって相当違いもあると思いますけれども。

李　鳳姫（愛知大学）　ちょっと関連して申し上げますと、日本語・日本文学の場合、一般的なコースとして、韓国（出身）で学部→日本留学（修士、博士コース）→帰国ということになりますが、学部では日本語を身につけるということで精一杯（多くは韓国内で修士コースに入っても）、やりたいと思っている専門分野に関しては、せいぜい授業で１，２科目講義で聴いているとか、１，２冊の専門書に接することぐらいです。それから自分でやりたいと思っていることを研究テーマとして、またはテーマもはっきり決められないまま、日本へ留学するわけです。

日本では、テーマによって何々先生のもとにふり当てられるとか、自分で申し込んだりして、その教官のもとで指導を受けながら研究を深めていくことになりますが、留学生当人としてはゼミに参加したり難解な文献に取り組んでレポートを書いたりしながら、単位をとるということで精一杯、それが一応終わると、なるべく誰も言わなかったことに焦点をしぼって論文を書き上げる。いざ自分のやったことが全体からみれば何だったのかと自分でもはっきりしないまま、帰国してしまうというようなことになるのではないかと思われます。

また研究者の量からみて日本とは全く事情が違っていますので、いざ講壇に立つとなると自分のやった研究だけではどうしようもな

いと言うことがいくらでもあるわけです。それで、二〜三人の先生が教えるべきことを一人で効果的に伝えるためにはどうすればいいのかの把握もできないところからくる試行錯誤が多いのではないかと思います。ですから留学生の場合は、自分の研究テーマの周辺も把握できるように概論などのコースなどがあればいいと思います。
私は一応言語教育ということをやっていますが、こういうところから発生していると思われるトラブルは、けっこう頻繁に起きていると思われます。だから、全体が把握できる段階があって、それから指導教官のもとで、文献を扱うとかというふうに入っていけたら、と思います。

司会　ありがとうございます。今のは日本における留学生教育の問題のこれまでの欠陥のご指摘でした。

李　鳳姫（愛知大学）　送り込む方でも一応準備なしということが考えられるわけですけれど、先生というのは自分の習ったことしか教えられないので。

金　春美（高麗大学校）今の問題に関して、最近の高麗大の大学院生たちを念頭に置いてお話ししたいと思います。
文化人類学とか社会学のようにフィールドワークを重視する分野は方法論も自ずと異なってくると思いますが、最近の若い大学院生たちは欧米の方法論、つまり文学理論を通じた文学研究に関心があるようです。それは鈴木先生も含めた日本の若い世代の人たちの文学研究の方法にも見られる傾向ですね。方法論や理論に注目するというのは、必ずしも作品外のもので作品や作家を裁断するということではなく、たえず生産され消費されつづける文学（作品）の様相を、より客観的に見つめてみたいという欲求から出てくるものではないかと思います。こちらにいらっしゃる鈴木先生も、日本文学史の読み直しとか、あるいは「文学」という概念の形成過程に関して

きわめて理論的な探究を行なっていますが、その動機は同じようなところにあるのではないかと思います。当然のことながら韓国で日本文学を研究するということは外国文学としてそれを研究するということですから、いわゆる文壇ゴシップのようなものから作家に対する固定観念にいたるまで、日本文学を支えている数々の風聞からある程度自由な立場で作家や作品に接することになるわけです。このことが必ずしも絶対的な理論的立場を保障するものとは限りませんが、日本国内に渦巻く数多くのバイアスから自由な目で、日本文学の作品や作家を見ることができるとは言えるでしょう。その代わりに他のバイアス、つまり韓国における日本文学観と申しますか、そのような言説が研究者のバイアスとして作用することはあるでしょうが、極端なことを言えば、そのようなバイアスの方が日本の日本文学研究者には歓迎されると言えるかもしれません。

最近の若い学生のニーズも、単なる作品論や作家論よりは、文学（作品）に対するこのような理論的姿勢を模索しようとする傾向が強いと思います。もちろん、理論的探究に没頭するあまり、一次文献の耽読がおろそかになってはいけないんですけれども、ある構図から日本文学の諸作品を学生に提示するという方法は、外国文学として日本文学を研究する場合にある程度有効だろうと思います。例えば、去年の秋学期の大学院の授業では、キルシュネライトの『私小説－－自己暴露の儀式』を参考書にして、私小説作品の講読から私小説論の実際にいたるまでサーベイしてみました。鈴木先生はキルシュネライトさんのこの業績にあまり肯定的ではないようですが、私があの本で面白いと思ったのは、私小説が研究や批評の対象となる場合は往々にしてその後進性や自然主義の奇形性、未成熟さが指摘されてきたんですが、彼女の研究では私小説が読者を獲得した「魅力」に対しても言及されているんですね。つまり、日本の批評家が批判の対象にしたものがイコールその魅力となっているわけです。たとえば私小説の主人公が真摯な苦悩の中で垣間見せるだらしなさのようなものです。そのようなものがなぜ小説として描かれ

ざるをえなかったのかという歴史的な問題は、日本の私小説論や私小説批判を読んでいても解決の糸口が見えてきません。そのような点で彼女は日本の研究者にはできない素晴らしい研究をしたと思うんです。そして大学院の授業を受講した学生たちの反応もおおむね似たようなものでした。またそこで私も含めたあの授業の参加者が発見したのは、鈴木登美さんが『語られた自己－－日本近代の私小説言説』で明らかにしたようなこと、すなわち日本の批評家がいかにして私小説を語ってきたか（私小説言説）ということだと思います。偶然といいますか、鈴木登美さんもアメリカ（コロンビア大）の日本人研究者で、やはり海をへだてて日本文学を眺めていますと自ずから理論的にならざるを得ないという部分があるのではないかと思うんです。もちろん、なぜ、今、私小説かという問題は残りますが、日本で突破口を開けない問題が海外で糸口を見つけるということでは、キルシュネライトさんや鈴木登美さんの業績は好例ではなかろうかと思います。

司会　さきほどの渡辺さんの発言を、私が一方的に研究の方法論へ持っていってしまったんですが、まず最初でおっしゃったことは、日本でこれから課題になるようなことがもう既に韓国の先生方が課題になさっているというようなことでしたよね。これは日文研の講師の人や大学院生の昨日までの感想なんですけれども、今回のシンポジウムは、非常にレベルが高いということで感心していました。彼らの率直な感想だと思いますので、ご発表の先生方に感謝の念を込めてそのことをご報告しておきます。

それでは、別の問題もご発言がありましたら。

劉　建輝（日文研）　私は中国から来た者で、それにコリア研究者でも何でもないんです。ですから全く外野の野次ということで受けとめていただきたいんですけれども、いろいろ伺いまして、私、一人の中国人の研究者としても全く同じ悩みを持っているようなと

ころがたくさんありました。それで3日間、僕は昨日は来られなかったんですけれども、実にいろんな面で多くのことを考えさせられました。

最後のところでまたちょっと方法論に戻ったような形になるんですけれども、今日ここに集まっていらっしゃる先生方はあえて三つに分けられると思うんです。つまり、いわゆる日本で生まれた在日の先生方と、韓国で生まれたんだけれども日本に来て、今日本で仕事をされている先生方、あとは韓国本土で研究なさっている先生方。これは多分最初からこういう意図でお招きしたんだと思うんですけれども、その三つのグループは私は、多分、方法論的にも、あるいは立場も、学問のアングルも全くとは言わないけれども、かなり違うと思うんです。皆さんはそれぞれその違いを引きずってこの議論の場に来たんだと思うんですが、実は似たような現象は中国にもありまして、全くパラレルな関係にあると思うのです。つまり私自身はどちらかというと、いわば中国で学問を多少かじった後日本に来たグループに入るんですけれども、そうすると、これは初日金春美先生のご講演の中でもふれられましたが、それぞれ別の国、あるいは学術環境の中で学問をやる場合、苦悩が非常に違うんですよね。僕は中国でやっていたときなどは、まず中国的な方法論でやらないといけないし、また読者、あるいは観客、聴衆などが全部中国人ですので、やはりそのニーズに合わせるということもあります。そうすると立場上、日本をあんまり客観的に伝えるとかえって反感を買う場合もありますので、どこで感情を移入し、どこで客観化するのか、かなり難しい操作が要求されるわけですね。

逆に、日本に来てから、私は最近比較文学をやっているんですけれども、中国のことを日本人に伝える場合、これもまたいろいろ難しい点があります。これは中国の場合は、特に現体制にはいろいろ問題がありますから下手するとこれを庇っているんじゃないかとか、あるいは逆に批判を加えると、今度は何で日本びいきになったのとか、そういう立場上の困惑が常に感じられます。そしてこれは

自分の研究のアングルにも響いてくるし、方法論にも響いてきます。さきほど尹先生が「断絶」のことをおっしゃったんですけれども、まさにその断絶を克服しないといけないと思います。現時点で言えば、例えば尹先生みたいに日本で学問を修得されたあと、韓国に戻って教える方もいらっしゃるし、また逆に韓国で勉強してから日本に来て教える先生もいらっしゃる。いわば従来の断絶が少しずつ破壊されている事実も大いにあります。そういう意味で、それぞれの基本的な立場を抑えながらも、出来る限りこの断絶を相対化することが非常に大事じゃないかと思います。そして、これを実現させるためにはやはりアングル的にも、方法論的にも一種の多様性が必要とされます。私自身の経験で言えば、常に両方の事情を視野に入れ、複数の角度から日本という対象をとらえると、わりあい本格的に客観化することができるのではないかというような気がします。そしてそれは伝える相手によって多少の配慮が必要とされるかも知れないが、基本的には一つの普遍性のある「真実」として受け止めてもらえるのではないかと思います。

以上、長くなりましてすみませんでした。

金　容儀（全南大学校）　日本人の研究者にぜひひとつ聞かせていただきたいことがあります。ここ3日間のシンポジウムを通じて、今、韓国で日本についての研究がどうなっているかはある程度おわかりになったかと思います。それと関連して、韓国で活躍している韓国人の研究者に対して注文なり、こういうことをやってほしいとか、こういうことを期待しているとか、そういう点があれば、こういう場で聞かせていただきたいです。

金　良柱（培材大学校）　それと関係ある、注文というか提案ですが、これはひんしゅくを買うかもしれないのじゃなくて必至だと思いますが、在日外国籍研究者もいらっしゃいますね。一言もまだおっしゃっていない方がいらっしゃるんですね。ですから、準強制

的にでも一言ずつ同じくお話をいただければ私たちの勉強になると思います。

趙　鏞吉（作新学院大学）　少し自己紹介すると、珍しいケースだと思うんですけれど、ちょうど11年前日本に留学して、博士の学位を取って一応韓国に戻ったんですね。6年ぶりに去年の4月からまた日本に来たものですからちょっと違ったケースだと思うんですが。それから、日本での専門は社会工学で、工学部ですから、その中で公共政策ということを専攻したんですけれど、違った立場でちょっとお話ししたいと思います。

三つぐらい申し上げたいと思うんですが、先ほど留学生に対しての教育システムという話が出たんですけれど、私の専門はもともと経済学ですから、ちょっと立場が違うんですね。というのは、例えば日本に来て日本の文学、日本語を専門にして、韓国に帰ったら、その人は韓国で一番専門家ですね。つまり日本文学では彼が一番なんです。ただ、経済学部、あるいはそのほかの分野で言えば、その人はやっぱり日本専門家というふうに位置づけられるんですね。それがちょっと違うかなという感じで、やっぱり韓国ではアメリカで勉強した方が中心になっていて、日本で勉強した方は、前は経済学部というと日本で学位を取ることが難しかったので数が少なかったせいもあって、それなりにいろいろ例えば就職先もあったんですけれど、今は数が増えて、日本文学とか日本語を専門にした方とはちょっと違う立場にあるんです。それがやっぱり地域専門家になって、日本の経済とか日本のことをやらざるを得ないというか、そういうふうになると思うんです。

その中でも大学に行った人も結構いるのですけれど、大学のシステムが、例えば韓国の経済学部で言えば、韓国のシステムは完全にアメリカ化されています。例えば韓国で経済学で修士を取った人はアメリカに行って、全く同じ教科書で、幾つかの単位は授業をやらなくても試験が通るぐらいなんですね。日本のシステムというと、

やっぱり大学院では論文が中心で、自分がテーマを選んでやって、周りからサポートしてもらうのですけれど、アメリカとかのシステムはやっぱりカリキュラムがコース中心なんですね。ある程度は引っ張ってくれるという形で一番最新の理論を教えてもらうんです。韓国で大学院へ行って経済学の先生になったら、アメリカで勉強した人は、そのノートとか教科書をそのまま講義で使えるんですけれど、日本の場合は新しく整理しないといけないかなという差があるんですが、そういうことは日本に住んでいる在日研究者も同じ立場だと思うんですね、正直言って。経済とか政治専門だったとしても、韓国語を教えてくださいとか、韓国の文化を教えてください。私も以前留学したときは韓国とはちょっと関係なくて一般的なことをやろうと思ったんですけれど、やっぱり今度また来ると韓国の専門家にならざるを得ないというニーズとかということがあって、また今度こういうふうなネットワークがあるということは非常に自分にとっては有意義なことだと思うんです。

それからまた、今日のコミュニケーションの中での感想なんですが、やっぱり韓国人と日本人はちょっとコミュニケーションの仕方が違うかなという感想を聞かせていただいたんですけれど、自分としてはそういう韓国とか、日本とか、アメリカとかいう国よりは個人の差がもっと大きいのじゃないかなということをちょっと感じました。

もう一つは、韓国とか日本をテーマにした研究では、やっぱりちょっと学際的な、インターディシプリナリーな研究が必要かなという感想を受けました。

ありがとうございました。

廉　恵晶（全北大学校）　今のご発言につけ加えてお話させていただきます。私は日本へ89年に参りまして、95年に帰国致しましたから6年半ぐらい東京の文化女子大学で勉強致しました。衣類学を

専攻致しまして、私は日本が目的ではなく、デザインとかファッションがやりたいのだが、それがたまたま日本であったわけです。帰国致しましたら、ファッションと言えば日本もそうだと思いますが、フランスとかアメリカが中心になっていて、講義のテキストや研究の方法論がそちらからきたものが基本となっていました。ですから、自分のアイデンティティを生かす研究分野や方法を考えるよりは、現在の状況が求める通り講義をして研究活動をしてきたのが事実です。

その内に「日本を強くした文化コード16」という本のなかで、キモノに関して原稿を書いてみてわかったことですが、数多い学生が日本でファッションや衣類を専攻に留学しているにも関わらず、韓国では、日本の服飾やファッションをテーマに研究している人はあんまりいないということです。本が出版されるやいなや、キモノの貸し出しをお願いするお電話を頂いたり、キモノに関する研究の相談を受けたりして、急にキモノの専門家になったような気がするほどでした。

それをきっかけにして、私は、“現代ファッションにおけるキモノイメージ・デザインの分析”というテーマで研究をスタートし、このシンポジウムで中間発表という形で発表させて頂いたわけです。これからこの結果を土台にして、西洋を中心にしてきた現代ファッションの中で、韓国や中国までを含む、東洋服飾のもたらした影響やその未来に関して研究していくつもりです。また絶えず変化し続けている日本のストリート・ファッションを分析して、韓国の若者文化やストリート・ファッションと比較分析していくつもりです。それが、私に与えられた大きな研究テーマであると思っております。

小松和彦（日文研）　3日間、ちょっと用事で抜けたときもありましたけれども、お話を聞かせていただきまして、とっても私は勉強になりました。

私はこちらに来る前は留学生を教えるようなコースにいたのですけれども、留学生の場合にはもちろん韓国から来られる学生も多いわけですが、それ以外の方もたくさん来るんですね。そういう留学生の方というのは日本文化についていろんな形で手ほどきを受けながら、最終的には専門の日本研究をすると同時に理論を勉強するわけですが、残念ながら日本は急速に、留学生を入れるというようなことになりましたので、大分整備されてきましたけれども、先ほどご指摘がありましたように、留学生に対する十分な対応の仕方というのを持っていなかったということが一つあるかと思います。

それと、国際日本文化研究センターが今回このような会を主催しましたけれども、日本人による日本学というのでしょうか、そういう場所が実はないんですね。日本も自分たちのことを総合的に研究しようということを考えたのはつい最近だったというようなことでしょうか。西洋のことについては非常に細かく研究して、これも語学と文学が中心でありましたけれども、日本人による日本学会というのがございません。そういう意味では韓国における日本学会と対応するような学会があってしかるべきなんですけれども、なかったということも、このようないろんな分野の方々が日本を研究している、その受け皿がなかったという問題を今回非常に気がつかせていただきました。そういう意味では、このセンターが多少ともそういうようなことをやれて、こういう機会をどんどんつくっていければいいなあというふうに思いました。

もう一つここで問題になってきた、恐らく何人かの日本人研究者は韓国に興味を持っている。その場合、韓国、あるいは北も含めまして、在日の方も含めまして、タイトルは「コリアにおける日本研究の現在」だったのですけれども、もう一つ、韓国の研究というのでしょうか、あるいは北も含めた研究について知りたいことを日本人たちは持っているわけですが、そういう場をぜひとも、これは我々がやることなのか、あるいは別のところがやるべきなのか知りませんけれども、そういうような場も必要だなあということをちょ

っと印象を持ちました。

司会　今度のシンポジウムのひとつの特徴は、構成メンバーの年齢が大体中堅の方から若い方をかなり多くお呼びしたことではないかと思います。あるいはこういう会自体、たとえば昨日ある新聞社の論説委員の方がいらして、大変面白いと言って聞いていらしたんですけれども、韓国に長いこといらした方ですが、この会自体にほかに何か特徴的なことはあるのでしょうか。どうでしょうか。

金　春美（高麗大学校）　実は、このシンポジウムにお招きいただいて、初め私が挨拶をしたときに、日文研で海外における日本研究の現状、特にその中でも韓国に注目されてこのようなシンポジウムを、私が予想していたよりもずっと大規模な、本当に盛大なシンポジウムを企画してくださったことに対して感謝と賛辞の言葉を述べましたが、3日間のシンポジウムを通して私が実感したのは、実は私、ここに来て初めて会った方々がほとんどなんです。つまり、私は日文研で2年間お世話になりまして、日文研でインターディシプリナリーといいますか、学際間の共同研究という研究会のあり方にものすごく共感を覚えまして、高麗大に戻ってから日本学研究所をつくるときも、やはり学際間の共同研究、また学問成果の交流、共有ということを念頭に置きまして、語学、文学だけではなくて、社会、文化、歴史等を一緒に入れておきました。それはまさに私が日文研で体験して、これが望ましい、そういう今後の研究の一つの方向ではないかと思ったものですから、それを私なりにそういうふうに実践しているわけなんですけれども、今回のシンポジウムはそれこそそういうふうな多方面にわたるいろいろな方が、ご自身が今まで研究してこられたことを発表してくださって、日本側の学者はもちろんでしょうけれども、韓国から来た私も韓国における日本学研究の現状を本当に実感できたということ。これこそ学際間の研究成果の共有ということで、今後の研究の方向性というものをある程

度私たちなりに把握できるようなものではないかということを実感いたしました。

それで、私としては、ただ発表された論文とか方法論とか、それにかなりのばらつきがありまして、それは今回申昌浩さんが発表する方を選抜したプロセスを聞いてみますと、それは当然だろうということは思いましたけれども、でも、むしろそれがある意味ではかなり刺激を与えてくれたような感じもなきにしもあらずということです。今回のシンポジウムが韓国における日本学研究に何か実践的な問題意識を共有できる場となったのではないかと私なりには今考えております。

それにもう一つ、日本在住のコリア研究者、それから日本人コリア研究者の方々とこういうふうに一堂に集まって、皆様が今研究なさっているものを拝聴できたのも、とても多くの刺激と示唆されたものが多いので、私の希望としましては、こういうネットワークを日文研のほうと一緒に何らかの形でつくりまして、今後とも引き続きこういう場を継続していきたいという願いを持っております。

司会　今後の展開のご提案も含めてのご意見でした。今後ですけれども、何らかの形での国内あるいは韓国でのシンポジウムということは我々としても考えておりますが、どういう形でやっていくのか。今回は全部アンケートでご発表題目を受け付けましたが、韓国からは、『日本を強くした文化コード16』の執筆者の方々を中心にきていただきましたが、この形で、ただ各分野の方々が集まって報告し合うというのだったらあまり発展性がない。もう少しテーマを絞るなり、あるいはインターディシプリナリーは原則にするけれども、対象を絞るなり時代を絞るなりというような形での展開を考えていきたいと思います。

日文研は海外研究交流室がすべての窓口になっていますが、韓国側でいわば国際シンポの受け皿になるような組織ができるとありがたいのですが。例えば日文研に一度でもいらしたことのある方々で

組織をつくっていただいて、そこで提携するとか、そんなふうな形での模索があり得るかと思います。

金　春美（高麗大学校）　さっき、韓国の家族関係と日本の家族制度はすごく違うとか、そういうお話も出ましたし、コミュニケーションの仕方の違いとかいろいろな話が出ました。今回は初めてで、しかもインターネット上に出ている方にそれこそアトランダムに手紙を送って、ちょうど時間が合った方が来られたという面もあると聞いておりますので、この次からはある程度テーマを絞って、それで、もしも日文研でやるときは例えば日本のほうの教授としてカウンターパートになれるような方がいるようなものを中心にしたほうが、やはり両方の意見を聞くことができて、研究の成果が上がるのじゃないかという思いがします。

それから、韓国のほうの受け皿なんですけれども、特定の機関とは日文研は結びつくとちょっとまずいとおっしゃるので、これはどうしたらいいのか、また後ほどこちらにいらした先生方と相談してみることにしますが、例えば日文研のＯＢたちですね。その人たちが全く民間ベースで学術交流をやるという形で始めたらどうかと思います。

ただ、ここで一言ちょっとお断りしておかないといけないのは、もしも皆様がいらっしゃる場合に、なるだけ大勢の方に来ていただきたい。特にこういうふうに日本人コリア研究者、それから日本在住コリア研究者の方々には、ぜひとも来て、今どういうふうな研究をどういうふうになさっているのか、私たちをまた外から見る、そういう相対化作業、それを私たちもぜひとも伺いたいと思っておりますのでご参加をお願いしたいのです。ですが、日文研のように経費を出せませんので、なるだけ頑張りますけれども、宿舎程度でしたら何とかなると思います。例えばソウル大学や梨花女子大には外国人ゲストハウスのようなものがありまして、そんなに高くないので、そちらはどうにかなるのではないかと思います。日本でこうい

う場をまた設けてくださったので、これからまた韓国でもこういう場を引き続き持つようにしたいと思っております。

司会　ありがとうございました。

時間がないので急いでしまいますが、私も二つ提案があります。一つは、この会議のプロシーディングのことなんですが、このシンポジウム全体のプロシーディングは出さずに、「コリアにおける日本研究の現状」ということで、海外交流室が「世界における日本研究の現状」というのをずっとシリーズで出しております。例えば日文研にいらしたその国の方々、あるいはその国のその分野の先生にそのことを書いていただくというような形を蓄積していって、それを世界に発信しているわけですけれども、韓国における研究の現状分析を報告してくださった先生方のものは「世界における日本研究の現状」に掲載させていただきたいのですけれども、よろしいでしょうか。

それと、ご自分の専門分野に関する報告をなさった方については、日本語で発表なさっていますので、ぜひ、『日本研究』という日文研の紀要に投稿していただけないでしょうか。この研究集会のシンポジウの総特集として載せるかは編集委員会と相談しないといけないので私の一存では決められませんけれども、そちらに投稿していただきたいということです。ご異論がなければ、ぜひとも今の提案に添ってお願いしたいです。

それからもう一つ、これは全く個人的な提案になりますけれども、これはシンポジウムの中でも言ったことなんですが、やっぱり韓国あるいはコリア圏と中国と日本との三つの比較研究みたいなことはいろいろな形でやっていかなければいけないことではないかと思うんですね。二国間の協力関係はもちろん必要なんですけども。

実は、劉さんが旧「満州」の共同研究会を立ち上げます。こちらも共同研究をやるし、中国の先生の主体性においてやっていただいて協力関係をする、日本でも復刻などをしていくというシステムを

構築しつつあります。それともかかわりますが、昨日、懇親会の席で芳賀徹名誉教授が総督府時代のことをぜひともやりましょうということを提案なさっていました。資料がまだたくさん眠っている、その掘り起こしなどもやっていかなければいけないのではないかというふうに私個人は思っていますが。韓国における近代化の問題、日本の近代化のゆがみの問題等々、それをきちっとやっていかないといけないと考えております。韓国の先生方にもいろいろな形でのプロジェクトに参加していただくということも必要でしょうし、また総督府時代のことというのも日本人の学者はかなり関心を持っている人もたくさんいますので、そのあたりのこともご配慮願えればありがたいということです。

金　春美（高麗大学校）　もう１点だけよろしいでしょうか。まだまだ先のことで、今は全く不確実な話ですけれども、もし、ソウルでこのようなシンポジウムをまたやることになりましたら、皆さんからの原稿はあらかじめ論文形式で提出して頂いて、それはきちんとプロシーディングの形で冊子にして用意できたらと思います。今回は本当に自由な形式での発表でしたけれども、次回はなるべく学術論文の形式に合わせた形で事前に配布して頂きたいと思うんです。これはもしかしたらコリアンスタイルの強要になるかもしれませんが……。日本の発表形式はこのような形が一般的であることは充分承知していますが、どうも「＜座＞の文学」のような形式のようにも思いますし、韓国人をはじめとする外国人にはなかなか馴染みにくいとも思うのです。発表者が聴衆を前に、自らの見解を俳句や連歌のように述べながら、同時にインスピレーションのようなものを得ようとするのは分かりますし、そのようにして絶えず問題意識を更新していこうとする日本の研究者の方々の熱意も理解できるのですが、やはり頭の中にあることをすべて書いて見せるということも重要ではないかと思うんです。書きだすと何を書くかわからないということもあるのですから、ある意味では「いさぎよく」最後

まで原稿をお書き下さって、発表の場所でさらに意見を聞いて問題を練り直すという順序の方が、特に外部からの参加者がある場合には会合を進めやすいと思います。

司会　わかりました。私はわりとルーズな形で進めて、成果はきっちりまとめるという形がすきなので、今回はこんな形をとらさせていただきました。

ほかに何かありますでしょうか。なければ、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。